

20世紀は『児童の世紀』だったのか？ エレン・ケイの
100年前の名著を現代保育に活かす道を明らかにする

最新刊

エレン・ケイ 保育への夢

『児童の世紀』へのお誘い

『児童の世紀』とは、エレン・ケイが新しい世紀のスタートを目の前にして、これからの時代こそ子どもたちにとって幸せな世の中になければ、という意気込みで執筆したことがよくわかる、見事なタイトルです。その願いにもかかわらず、20世紀は必ずしも子どもたちの世紀にはなりませんでした。

しかし、『児童の世紀』には、現代の保育や子育てへの素晴らしい見聞が、随所に散りばめられています。前著『倉橋惣三 保育へのロマン』に引き続き、荒井洌先生が今回はエレン・ケイの著作に取り組み、彼女の優れた思想・哲学を分かりやすく解説します。

激動の21世紀初頭に贈る、本当の意味での保育改革の道を明らかにする話題の本です。



(この本の内容)

- I 100年目に読む『児童の世紀』
わが道をゆく／自由な遊び／子どもと遊べる者／わたしの夢みる学校／いたずら／家庭生活の芸術家／二人の完全な幸福のもとで／根と花の相互関係／子どもの国よ そのままにてあれ／美しい糸を織り込む／自然の美や芸術の美／農家の小屋に点じた理想の光
 - II 読書ノート『恋愛と結婚』
性道徳の発達過程／恋愛の進化／恋愛の自由／恋愛の選択／母となる権利／母性からの解放／社会における母性の役割／自由離婚
- 付 エレン・ケイをめぐる
「青踏」のこと、カール・ラーションのこと

荒井 洌 (白鷗大学女子短期大学部教授) 著

A5判 176頁 定価：本体2,000円＋税

キンダーブックの
フレーベル館